

## 詩篇 96 篇、使徒の働き 13 章 1-4 章

つい最近、（カンタベリーではない）別の教会で若いクリスチャン（ここではジェニーと呼ぶことにします。）と現在の生活と将来の宣教活動について話をした時のことなのですが、私はいつも通りに「仕事を探している事」や、「人々と会っている」などをおおまかに話しました。しかし、彼女はそれを聞き流すのではなく、いきなり金銭面のサポートといった核心を突いた質問をしてきたのです。私はゆっくりだけれども着実にサポートは増えてきている、しかし、依然長い道のりだと答えました。すると、（彼女は遠慮とは無縁の性格です）いきなりジェニーは私の方を向き、「何で仕事をしないの？ お金を稼ぎ、貯金をすれば、出発できるじゃない。」と言って、別の人と話をしに行ってしまった。私はとてもショックで暫く動くことができませんでした。

しかし確かに、ジェニーはいいポイントを突いています、、、どうして私はそうしないのか。どうしてこの教会の人達、また他の教会の人達をわずらわせることを止めないのか。そもそも、どうして私が日本に行く計画を教会の皆に話すのか。いったい彼らと何の関係があるのか。冒険や理想の休暇と本当は同じではないのか。自分でお金を貯めて、旅行に出かけ、それを楽しむ。計画、、、宣教、、、それが何であれ、ただ自分の夢を叶えたいだけ、そうではないか、、、いいえ違います！

宣教の働きとはいったい何なのでしょう？そして、それは私たちの教会、MJCC、カンタベリー長老教会、世界中の教会にどのように関係し、影響するのでしょうか？この問いの答えこそが私を励まし、（ジェニーのような人たちとの会話に対する準備も含む）全ての宣教準備へと駆り立てます。そして、この宣教について説教するという本日の機会に私を導いたのです。（先生、本当にこのような機会をくださり有難うございます。）

聖書、特に詩篇 96 章と使徒の働きの一部を見ると、宣教は教会生活の基礎であり、聖書全体のメッセージ（＝これは神様のご計画の話です）においても、基礎であることが分かります。それでは、これを次の3つのポイントから見ていくことにしましょう。

1. 宣教の必要性
2. 宣教の喜び
3. 宣教に伴う犠牲

## 1. 宣教の必要性

まず初めに宣教の必要性です。聖書全体のメッセージがいかに私たちを宣教の必要性、宣教の神に向けさせるものであるかを述べたいと思います。今日は旧約聖書の箇所を見ますが、それは全世界に対する神様の宣教のご計画が聖書全体を通して表われており、イエス・キリストの後にただ加えられたものではないことを示すためです。

この詩篇で初めに気がつく事の一つは、ヤハウエすなわち、主、唯一のまことの神様の礼拝への招きです。詩篇 96 篇 3 節「**主の栄光を国々の中で語り上げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。**」創造と人類の歴史における神様のご栄光と偉大な御業は、声を大にして語られなければなりません！決して黙ってはいけません！4-5 節ではさらにこう続きます。ヤハウエはすべての神々にまさり、国々の民の神々は皆むなしく、偶像に過ぎず、ヤハウエこそが唯一の主であると。6 節～9 節では、ヤハウエのご栄光と御力と聖さ（すなわち、私たち被造物と比べて、道徳的に素晴らしく、常に自己よりも他を優先される神様のご性質）のゆえに、ヤハウエに礼拝を捧げるように国々の民を招いています。そして、万が一この箇所を見落としたとしても、10 節で「**国々の中で言え。『主は王である。』**」と明言しています。これは、主である神様が唯一の神様であられ、この世の全てを治め、司っておられるというとても明白なメッセージです。

これこそが聖書全体を通して語られているメッセージであり、ミッション（神様に与えられた使命）とは本当は何であるのかという事を理解する助けとなります。創世記に記されている神様と人間との関わりのはじめから、また、アブラハムを通してイスラエルの民と契約された時も、神様はイスラエルの民の

みでなく全ての人間を気に留めておられました。このことは創世記 12 章、アブラハムとの約束/契約の中に見る事ができます。

「私はあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者を私は祝福し、あなたをのろう者を私はのろう。**地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。**」(創世記 12 章:2~3 節)

建国時からイスラエルは、神の素晴しさを反映し、光として輝き、地上全体への祝福となり、国々を主のもとへ立ち返らせるというミッション(使命)を与えられていました。もちろん、旧約聖書の多くには、イスラエルがこの使命を果たそうと試み、そして幾度となく失敗する模様が詳しく描かれています。特に預言者達は多くの例を与えてくれます。これら全てとつながっているのが、将来現れるダビデの子、すなわち救い主です。そのお方は神の基準にかなない、イスラエルを治め、敵から救い出し、主の元へと導かれます。(第二サムエル記 7 章あたりからこの事が描かれています。) イザヤ書では、救世主への希望がしもべの歌の中に現れています。イスラエルは国として神のご栄光を他の国々に示す事に失敗しましたが、神様のしもべは失敗をしません。イザヤ書 42 章では、神のしもべが国々に公義をもたらす事が述べられています。6 節~7 節:「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。こうして見えない目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。」

イエス様がこの言葉の通り生きられたことは周知のことです。盲目や病気の者を治し、貧困に苦しむ者や下層階級の者や罪人と交わりを持たれました。イエス様は、そのような人々を救うために来られたのです。イエス様が十字架で亡くなられたのは、罪人のためだったのです。イエス様は人々を罪の連鎖から解き放ち、(詩篇のように)唯一無二であるまことの神様への本当の礼拝、悔い改め(罪から離れること)と罪の赦しへ召されました。また、神様の御国の到来と、神様の主権を宣べ伝えるようにも召されました。実際にこれはイエス様が弟子たちにお与えになった使命なのです。このことは、とても有名な聖書箇所であるマタイの福音書(28 章 18 節~20 節)にある大宣教命令に明確に記載されています。この箇所では神様は弟子たちに、ご自身の御業を続けて行うようにと命じておられます。

では、これら全てから宣教について何がわかりますか。まず第一に、神様が全ての中心であられるということです: イエス様を通して、神様が始め、人々を召し、救い、まことの礼拝へと導かれます。次に、神様は、ただの観衆としてではなく、神のご計画の担い手となるようにと(初めはイスラエルで、そして今日ではここ MJCC のように教会で)人々を召されます。最後に、神様のご計画の実現が教会を通し続けられることの必要性がどれほど重要かが、皆さんにもわかっていただけだと思います。使徒の働き 1 章 8 節では、弟子達が神様のご計画として、地の果てまで、すなわち、全ての人が福音を聞くまで、送りだされています。

ご存知のように、この計画は完成には程遠いのが現状です。ヨシュア・プロジェクト(福音の伝えられていない国や民族などの情報が載っている素晴らしいウェブサイト)によると、世界に存在する 16596 の民族のうち、6738 もの民族、つまり世界人口の 40% (約 30 億人) もの人々には福音が伝わっていません。(福音が伝わっていないというのは、その地域に福音派や聖書に基づく信仰をもったクリスチャンや、自分がクリスチャンだと認識している人がほとんどおらず、過去にキリスト教が伝えられた形跡がほとんどないという意味です。)

もう少し狭めて、私達に馴染みのある場所に目を向けてみましょう。今年の初め、私は日本で活動している OMF 宣教チームが提供している統計表をフェイスに載せました。この統計表は一見の価値ありですが、ここでは特に際立ったポイントについて触れたいと思います。

- 日本は、福音の伝わっていない民族世界第 2 位です(その内、私達がよく祈っている 2 万人はここメルボルンに住んでおり、(日本の全人口 1 億 2700 万人の 98%である)約 1 億 2300 万人が日本に住んでいます。
- 日本の現状は、人口 16071 人に対して 1 教会(全人口 1 億 2700 万人に対して 8000 教会)、また 64244 人に対して宣教師ひとりの割合です。一方でオーストラリアでは、1800 人に対して 1 教会(全人口 2400 万人に対して 13000 教会)です。
- 日本の 22 都市、546 町には教会が一つもありません。

本当に宣教の必要は深刻です。

これが私の第一のポイントです、、、信じれますか！どうか心配しないでください、実はこれが私の説教の大部分で、後の2つのポイントはこれよりもずっと短いです。

## 2. 宣教の喜び

私の2番目のポイントは宣教の喜びです。詩篇96篇を読むと、そこから喜びが飛び出してきました。全ての創造、地上にある全ての国々の神様への賛美と礼拝が、大きな叫びとなり、純粋な喜びがあふれ出ている感じがわかるでしょうか。数えると、喜び、歌、賛歌といった言葉が12回も使われています。これは実に1節に1回の割合です。また、神様の栄光、救い、義といった言葉も17回出てきます。詩篇の作者は賛美を抑えることができず、喜びの賛美と礼拝を私たちの偉大な神様に捧げよと、地、海、造られたすべてのものに呼びかけています。

あなたはクリスチャン生活の中で、このような体験をしていますか。誤解をしないでいただきたいのですが、四六時中この喜びがないからといって、私は皆さんに罪悪感を与えたい訳ではありません。詩篇にも様々な感情の描写があるように、クリスチャンにも痛み、悲しみ、困難などは訪れます。詩篇(特に終わりの方の詩篇)に見られるように、神様に感謝と賛美を捧げる理由はいつもたくさんあることを決して忘れないでほしいのです。この箇所を書いている時に、ピリピ人への手紙4章4節が頭に浮かびました、「いつも主にあって喜びなさい。もう1度言います。喜びなさい！」ここでは「主にあって」がキーワードだと思います。この世にある数え切れない程の戦争や紛争の問題は言うまでもなく、家族、財政面、仕事といった日々の心配事に打ちひしがれそうになる事が多々ありますが、どうかこれらの問題に目を奪われないでください。なぜなら私たちの主、イエス様がどのような方で、何をしてくださったのかを心に留めておこなら、そこはいつも喜びに満ちているからです。

そしてこの事以上に、主がご自身の民、教会にするように命じられたこの宣教の働き、あらゆる国の人々を弟子とする働きの喜びを忘れないようにしましょう。皆さんはルカ15章の有名な放蕩息子の例え話の前にイエス様がされた例え話を覚えていますか。10節には一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるとあります。天国で大きなパーティーが開かれるのです！人々をイエス様にある救い、イエス様を主とする礼拝へと導くことこそが宣教です。人々を暗闇から光へと招くことこそが我々の使命なのです。

もしあなたがまだクリスチャンでないのなら、イエス様を知り、罪の赦しを得るように、イエス様はあなたを招いておられます。ぜひ周りのクリスチャンに尋ねてください。もしあなたが既にクリスチャンであるのなら、あなたはここ日本語教会での奉仕に喜びを感じていますか？あなたのする皿洗い、聖書勉強会への参加、教会の働きの手伝い、日曜礼拝での賛美、とりなしの祈りやその他多々の奉仕活動には、イエス様と共に神様のご計画を担う喜びがあるのです。

## 3. 宣教に伴う犠牲

最後に前述の二番目のポイントに並ぶ三番目のポイントです。ちなみに、もしあなたが今日の三つのポイントの中から一つを心に留めておこなら2番目のポイント、宣教の喜びを選んでください。それは私がジェニーのような人や教会の皆さんに考えてほしいことです。しかし、最後に使徒の働きの13章にある宣教に伴う犠牲について少し考えたいと思います。

使徒の働き13章の中で私達は、宣教師を送り出す教会、しかもかなり日の浅い教会の素晴らしい例を見ることができます。その前の章では(特に11章と12章)では、エルサレムにある母教会が迫害され、クリスチャン達が散り散りにされた結果、アンテオケの教会がどの様に始められたのかが描かれています。神様の成しえることは本当に驚くべきことですね。悲劇からさえも素晴らしい恵みをもたらしてください！そして、パウロとバルナバはこの新しい場所と教会で働きを与えられました。

教会の歴史の初期にあって、クリスチャンへの迫害がある中でのアンテオケの教会の活動は困難なものでした。このような状況にあった場合、教会がパウロやバルナバのような重要な指導者にすがりついていたと思っても仕方のないことでしょう。(彼らの様な人物の名前が毎週の奉仕当番表からなくなる

ことを考えてみてください。)しかしアンテオケの教会は、喜んでパウロとバルナバをいくつもの宣教の旅へと送り出しました。

パウロとバルナバにとっても、この宣教の旅が決して心躍る様な冒険/休暇でなかったことは、使徒の働きの残りパウロの書簡を見れば明らかです。コリント人への手紙 第二 11 章 22 節～33 節にはムチ打ち、殴打、船の難破、常に危険と隣り合わせであるなどの宣教の働きにおけるパウロの苦痛が綴られています。今日であっても、宣教師達は肉体的、感情的、精神的な困難に立ち向かわなければなりません。2、3 つ例を挙げると、家族、友人やよく知る人達と別れることでの孤独や、宣教活動が禁止されている地域での権威者からの圧力、宣教活動や人間関係に対する強烈な霊的攻撃などです。彼らは本当にあらゆる助けを必要としています。

ここまでくれば私の言いたい事が見え始めていることでしょう。宣教師と送り出す教会には犠牲が伴います。これらはテレビで見られる旅行会社の「夢のような休暇」の広告とは全く違います。ではなぜ教会や宣教師たちはこれら続けるのでしょうか。パウロとバルナバのアンテオケでの活動はうまくいっていません。人々と良い関係を築き、居心地の良いものであったかもしれません。しかしなぜ、その生活を捨て彼らは迫害と拒絶の待つ困難な宣教へと旅立ったのでしょうか。皆さんがよく知るジェーンさんはオーストラリアで育ち、英語を話し、素晴らしい仕事もあり、家もあり、まさにオーストラリアンドリームを生きていましたが、なぜそれを捨ててまで生活費が高く、言葉も分からない異国の地へ日本へ行ったのでしょうか。

物質主義と自由気ままな生活習慣が蔓延した、お金中心のこの世界では、神様とそこのご計画について世間とかなり違った考えを持っていない限り、このような人々の行動は、全く意味を成しません。この世の理論では、それは何の意味もありません！しかし、もし神様とそこのご計画を理解するなら、完璧に意味を成します。そして、あなたは理解します。神様は聖書の開始点からヨハネの黙示録にある将来来る終点に至るまで働いておられます。そこでは世界中の人々が、新しい創造において、子羊の御座の周りにひれ伏すのです。(ヨハネの黙示録 7 章 9 節) その時、あなたは理解します。神様に与えられた宣教の使命は困難です。しかしそこには喜びがあります！暗闇にいる人々に呼びかけ、偶像礼拝から生ける神の礼拝、イエス様にある赦しと新たな命へと導くのですから！確かにそこに犠牲はついて回りますが、宣教師達がそして神様が教会に求めているのは、まだ達成されていない神様のご計画の実現に向け、キリストと共に働いていくことです。言い換えるなら、神様は宣教師を召し、教会を通して彼らを送り出されます。使徒の働き 13 章 3 節と 4 節の動詞「送り出す/遣わす」の主語は誰ですか。3 節ではアンテオケ教会、4 節では神様の聖霊です。教会は喜びを持って神様の召しに従い、宣教師達を世界中に送り出すことで、神様のご計画の実現のためにキリストの同労者として、この働きに加わるのです。

## まとめ

最後に、MJCC やカンタベリー長老教会で私たちは実際に何をすればいいのでしょうか。日本語教会でなされる全てのことに於いて、イエス様の同労者であることの喜びをいつも忘れずにいましょう。人々を暗闇から光へと導くことは喜びであり、特権です。主日礼拝、当番表にある奉仕、全ての教会の活動がこの喜びを反映するものであるべきです。さらに、ジェーンさんやジャクソン家族、シーモア家族をはじめとする宣教師達のために祈り、彼らと共に続けて仕える中でも、この喜びを忘れずにいましょう。また、神様が私たちに犠牲を払うことを求められる時でも、この喜びを忘れずにいましょう。惜しみなく与え、熱心に絶えず祈るという犠牲、時間を割いてサポートしたり、話を聞いたりするという犠牲。また、思い切って言いますが、日本のような、もっと多くの福音の働き手を必要とし、収穫を待つ畑に自ら出向くという犠牲。どうか、宣教の必要性、それに伴う犠牲、そして、神様の宣教、教会の宣教そして MJCC の宣教の働きの喜びを知ってください。